

第9回食と環境まつり・晴天で大賑わい

外国人観光客も会場で舌鼓

成功へ向けて一丸で準備

これ以上はない程の最高の好天に恵まれた2018年10月13日（土）午前8時30分、函館市若松町・旧シーポートプラザ前広場（摩周丸展示前広場）には、早朝から多くの仲間が集まり、なにかをやるうとしていた。

彼らの目的は、今年度で9回目を迎える「食と環境まつり」の成功へ向けた準備作業であり、今日まで準備を進めてきた実行委員、出店をする各ブースのスタッフ、応援で駆け付けた動員者、事務局達等70名を超えるメンバーであった。

過去最高となる30にも及ぶテントの設置・数百人を受け入れるための会場設営、のぼりや看板設置等の周辺装飾をおおよそ1時間で終えた後は、午前11時の開会に向けて各ブースは受け入れ準備に全力を注いでいた。

絶好の好天に恵まれたことやSNS等を活用したPR効果も手伝い、開始30分前にも関わらず既に会場内は多くの来客で賑わいを見せ始め、中には開始時間前の販売を求める人たちもいてスタッフが説得に一苦勞の場面も見られた。



いよいよ開会間近に

函館赤川中学校吹奏楽部の青空に響き渡るファンファーレと、ユニークで絶妙の向田実行委員（全農林）の司会で幕を開けた「第9回食と環境まつり」は、冒頭、残間実行委員長（食・みどり・水を守る道南地区労農市民会議議長・連合渡島地協副会長）から「青森県で同類のイベントを参考として立ち上げてから9年が経過し、多くの市民の協力も得て規模も最大のものとなった。この取り組みを通じて食の安心・安全を求め、世界的課題でもある環境問題についてお互いに考えあっていきたい」と参加者に訴えた。長谷川義樹連合渡島地協会長、逢坂誠二衆議院議員のご来賓挨拶を受けた後、いよいよ販売開始の合図へと移っていった。



この頃には、既に会場内は溢れんばかりの来場者で埋まり、ブースによっては長蛇の列も。開始の合図を今かいまかと待ち望んでいる状態となっていた。

開始と同時に長蛇の列も

「販売開始！！」司会者の合図と共に各ブースには多くの来場者の列が出来、我先にとお目当ての品物を買って求めていた。とりわけ、例年ではあるが、野菜の価格高騰を受けて、農民連盟ブースの＜朝採り野菜の格安販売＞や＜野菜の詰め放題＞には長蛇の列が出来、両手一杯に

手提げ袋数個をぶら下げている姿は、今の社会状況を反映しているようにも思われた。

屋台の定番でもある焼きそば・焼き鳥・たこ焼き・ホタテの炭火焼きは、立ち上がる煙と広がる、臭いに食欲をそそがれて訪れる来客に、スタッフは汗だくでの対応に追われていた。また、今年から新たに参加した「日朝連帯函館市民の会」による本場の「キムチ・チヂミ」も、予想以上に売れ行きを伸ばし、常に買い求める人が途切れることは無かった。



前回は突然の解散総選挙の関係で参加を見送った留萌地協・釧根地協の特別参加も今年は行われ、それぞれに＜留萌のタコ飯＞・＜仙鳳趾の蒸し牡蠣＞の提供が行われ、出店を待ち望んでいた多くの来客で大盛況を迎えていた。なお、両地協の出店に当たっては、連合北海道や後志地協、胆振地協が視察と支援を兼ねて参加し、積極的な協力を頂いた。

その他の多くの「食のブース」も活況を帯び、賑わいを見せていた。

環境ブースも負けず劣らず

環境ブースも従来以上に客足が伸び、スタンプラリーやペットボトルロケット工作コーナー



には、多くの小・中学生が参加し、景品ゲットに喜びを表したり、思った以上に飛んだロケットに驚きと興奮に溢れていた。

パネル展示では、アジア・アフリカ支援米活動パネル展や、身近な環境パネル展示、更には世界の水事情に関するパネル展示が行われ、なかなか日常では目にできないだけに、来場者の多くが興味深く見入っていた。

子供向けゲームコーナーでは、輪投げやストラックアウトに多くの子供達が集中し、幼子は親と一緒に（親の方が子供と一緒に…）遊び、景品のお菓子をもらって大喜びの姿は、何時みてもほほえましいものであった。

国際色豊かなまつりに？

今回の食と環境まつり会場は例年と若干異なり、観光シーズン期であったことや、豪華クルーズ客船の寄港とも重なり、会場内には多くの外国人が訪れて、物珍しく見学をしたりビデオやカメラで撮影したり、各店舗の味に舌鼓を打ったりと国際色豊かなイベント会場でもあった。

森地区連合が企画した抹茶の「野点」（のだて）にも外国人が参加し、苦い抹茶を飲む顔も、日常ではあまり見かけない光景で、思わず顔がほころむ様に思えた。



会場は入れ替わり立ち替わりの状態で、最初から最後まで来場者が途絶えることなく、各ブースでは閉会前に完売する所も出始める程で、事務局の推定では延べ1000人を超えていたようにも思える（数年前も好天下で1000人近

い参加があったが、今回の人出はそれを超えていると思われる)。

新米の当たる抽選会は悲喜こもごも

開店から3時間が経過し、残された時間は後30分。新米抽選会の前に閉会挨拶に立った手塚副実行委員長(道南地区農民連盟委員長)は、「多くの市民の協力で今日まで取り組みを行ってきた。



食の安心・安全に対する課題は多くあるが、多くの人たちとの連携・連帯で今後もしっかりと運動を作り上げていきたい。この取り組みがその切っ掛けとなれるようより一層の充実・強化を求め、来年度の開催に結びつけたい」と力強く訴えた。食と環境まつりの最後は、今年の新米があたる大抽選会とあって、抽選券を片手に多くの来場者が

ステージに詰め寄り、今か今かと待ち望んでいた。

3JAや道南農連の協力で提供された新米は、大・小併せて90本近い数。抽選を行うたびに漏れるため息と歓喜の声と共に、走り寄る光景は既におなじみのもの。

残された本数が僅かになればそのため息と歓声は更に大きなものへと代わり、最後の1本が惹かれると、家路へ向かう人たちで駐車場が混雑となった。

次回は10周年の節目

類似するイベントを見学に青森県まで出かけ、道南バージョンの模索に2年を掛け、スタートしてから9年が経過し、いよいよ次回が10周年の大きな節目を迎えることとなる。

10個のテントから始まった「食と環境まつり」も今回のテント数は30張となり、出店内容も年々充実・強化が図られてきた。

何よりも、多くの市民層に定着の兆しが見え始めてきたことや、常に赤字を抱えても各ブース(出店)の協力体制が整ったり、また、一部の役員だけではなく、多くの組合員が積極的に参加してくれるようになってきたことは大きな成果ともいえる。

労農提携のさらなる強化、地域に顔の見える運動の質的強化、労働組合の組織強化、多くの市民団体との連携等々を目的意識的にとらえ、10年目以降もこの取り組みがさらに拡大・充実していくことをさらに模索していかなければならない。